

会員研究

奈良西大寺（称徳天皇編）

栗 光行

西大寺

奈良西大寺は奈良市西大寺町にある真言律宗の総本山です。

宝亀一一（七八〇）年の西大寺資財帳によると右京一条三坊に葉師・阿弥陀の両金堂と五重塔二基を囲む金堂院・十一面堂院・四王院・食堂院・正倉院等の建造群には仏像を祀つてた。

最初八角七重塔にする予定であつたが、都合により五重塔に変更された。

現在西大寺本堂の前に東塔の四角い五重の塔の基壇跡があり、その周囲に径27m一辺11mにおよぶ八角の敷石がある。この敷石は建築を予定していた八角七重塔の基盤の跡である。

この西大寺は、称徳天皇が藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱の平定を勅願し、鎮護国家の道場として建立し、聖武天皇の建立した東大寺と並ぶ壮麗な伽藍を誇る大寺で

あつた。

この八角の敷石を覗いていると建てられる事はなかつたが当時の西大寺の隆盛が偲ばれる。

しかし現在、西大寺を訪れる人影は少なく秘そりとしている。

一方、東大寺には南大門・大仏殿・二月堂・三月堂の前は修学旅行生・バスツアーの観光客・海外からの外国人が大勢来て賑わつてゐる。

聖武天皇と東大寺

東大寺を建立した聖武天皇には藤原不比等の娘光明子との間に阿倍内親王（後の孝謙・称徳天皇）と嫡子基王がいた。しかし、基王は2才の誕生日を待たずに亡くなつた。

天皇のもう一人の夫人具犬養広刀自（アガタイヌカイノヒロトジ）との間に2人の娘、井上・不破内親王と基王の死後生まれた安積

（アサカ）親王がいた。

左大臣長屋王は天武天皇の息子高市皇子の子で、元明女帝の娘吉備内親王を妻としていて有力な皇位継承者の一人であつたが、天平元（729）年、謀叛の陰謀を企てたとの嫌疑で死に追いやられた。

これは長屋王が皇族以外の女性、藤原光明子の立后（皇后にすること）に異議を唱えていたため、藤原不比等の子4人の兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が画策したものであつた。

藤原氏の4兄弟は長屋王を葬り、光明子を皇后にする事に成功したが、流行していた天然痘により相次いで死去、藤原氏の権勢は崩壊し、右大臣橘諸兄が吉備真備や玄昉（ゲンボウ）等の入唐留学僧・留学僧を側近として政界を主導した。

吉備真備は在唐20年、帰国に際し「唐礼（トウライ）」以下多くの書籍・武器・その他珍しい器物を持ち帰り大學助に、入唐留学僧の玄昉は帰国後僧正に任じられていた。

天平10（738）年、聖武天皇は21歳の娘阿倍内親王を皇太子に立てた。

聖武天皇は伯母の元正天皇が聖武の成人するまで皇位を守つたように、幼い安積親王が成人するまで10歳年長の阿倍内親王を皇太子とし、安積親王が成人したら皇位を継承させようと考えたのであろう。

天平12（740）年、九州大宰府に左遷されていた藤原宇合の子、広嗣が右大臣橘諸兄の側近玄昉の排除を要求して謀叛を起した。（広嗣の乱）。

広嗣の乱は中央政界に大きな衝撃を与え、聖武天皇は藤原氏の強い影響下にある平城京を離れ、以後五年間山背の恭仁宮（クニノミヤ）・近江の紫香樂宮（シガラキノミヤ）・摂津の難波宮等を皇都として各地を転々とした。

聖武天皇は河内の知識寺に祀られている毘盧遮那仏に礼拝する民衆を見て、大衆動員により藤原氏等貴族勢力を打倒しようと「大仏造営に当つては一枝の草、一握りの土を持つて像を助けて欲しい」と大仏建造を發願、協力を直接人民に訴え、私度僧や民衆の信徒団体を率いていた行基に協力を求め、甲賀で大仏造建を始めたが、貴族勢力の抵抗は強く、甲賀寺で

の大仏造建は中断してしまつた。聖武天皇が平城京に戻つたのは天平17(745)年のことであつたが、前年16年に17歳の安積親王が「脚病・脚氣」により急逝した。

安積親王の死は聖武天皇を尚一層仏教にのめり込ませた。

平城京に戻つた天皇は平城京の東、天折した基親王の菩提寺である金鐘寺(コンヨウジ)の地で大仏造営を再開したが、大仏の鑄造は行き詰まり、聖武天皇は古くから朝鮮半島・新羅遠征に関わり藤原広嗣の乱の平定を祈願させたことがある宇佐八幡宮に大仏造立の成就を祈願した。

宇佐八幡宮は八幡大神(応神天皇)と比売大神を祭神とし、神社境内に寺院を持つ神仏習合の先鞭をつけた神宮寺で、大仏造立を成就させる事の出来る神は仏法を崇める宇佐八幡をおいてしかない。聖武天皇は思つたのであろう。

この祈願に対し、八幡神は「天地祇のあらゆる靈力を結集して大仏造立を助成しよう」と託宣した。

以後宇佐八幡宮に対する聖武天皇の崇敬は格別に増し、八幡神は

大仏造立事業に積極的に関わつた。

宇佐八幡宮

宇佐八幡宮は豊前宇佐の地に主祭神の八幡三神、一の御殿には八幡大神(応神天皇)・二の御殿には比売大神・三の御殿には応神天皇の母神功皇后を祀る。

宇佐神宮の記録によると、一の御殿は神龜2(725)年・二の御殿は天平3(731)年・神功皇后を祀る三の御殿は弘仁年間(810~24)に造営されたとあり、天平期には神功皇后を祀る三の御殿はまだ無く、八幡大神と比売大神の二座からなつていたと思われる。

「八幡大神と比売大神との関係は明確でなく、本来別系統の神々で独自の由緒を持つ神々の複合体が「八幡様」で、古来武神とされる一方安産・子育ての神として崇敬され、また神託により国や人々を導く国家的守護神であると同時に鎮座する宇佐の地の固有の神の性格を有する。

孝謙天皇

天平21(749)年、聖武天皇は皇太子阿倍内親王に位を譲り

太上天皇と称した。阿倍内親王は三十二歳で孝謙天皇として即位した。

退位したが聖武太上天皇は先の天皇として天皇同等の権限を有し、皇太后となつた光明皇后はその宮職を紫微中台(シビチュウダイ)と改め、その長官紫微令は正三位相当の官職、太政官の次に光明皇太后の甥、武智麻呂の子の大納言藤原仲麻呂が兼務した。

橘諸兄は左大臣であつたが、腹心の玄昉は既に没し、吉備真備は筑前守に左遷していた。

孝謙天皇は皇太后の生存中は飾り物の天皇にすぎず、紫微令仲麻呂は光明皇太后の下で著しく勢力伸張させ政治の実権を握つた。

天平勝宝元(749)年11月「八幡大神自ら上京して東大寺の大仏と対面する」という神託があり、八幡大神が乗り移つた禰宜尼大神杜女(オオミワノモリエ)と主神大神田麻呂(オオミワノタマロ)が入京して鑄造中の慮舎遮大仏と対面した。この時八幡大神に一品・比売神に二品の位階が贈られ、宇佐八幡大神は国中の諸神を率いる天神地祇の頂点にたつた。入京に際し東大寺境内に八幡神

を勧請し手向山(タムケヤマ)八幡宮が創建され、東大寺の鎮守となつた。これにより八幡神が中央で活躍する拠点となつた。

天平勝宝4(752)年孝謙天皇は聖武太上天皇・光明皇太后と共に文武百官を率いて大仏の開眼供養が挙行された。この開眼会で使用された筆・墨をはじめ数々の用具は正倉院に現存する。

宇佐八幡厭魅(エンミ)事件

「日本書紀」に天平勝宝6(754)年11月「薬師寺の僧行信(キョウシン)と八幡神宮の主神大神田麻呂等が共同して人を呪殺そうとする呪法を行つた。行信を下野国の薬師寺に、大神社女と田麻呂は位階を剥奪し、日向と種子島に配流。その為別人を選び、禰宜・祝(ハトリ)を補任した」と記している。

翌年3月、八幡神は八幡神は自ら神宣を下し、先に贈つた封戸・位田を朝廷に返上し、宇佐の地を離れ四国宇和島に自ら流罪に処した。

宇佐宮は八幡神と比売神を祭神とするが、八幡神は早くから大神氏と結びつき、比売神は宇佐氏・

辛島氏と関係を持ち、八幡宮内における神職集団の思惑・行動は必ずしも一致していたわけではない。

大神杜女と田麻呂はいずれも大神氏で、事件後大神氏に代わり補任された宇佐氏・辛島氏による宇佐宮の神官間の勢力の交替があった。

そこで宇佐宮の祭神として比売神が下した結論が「大神氏との関係を絶ち、封戸・位田を返上し、八幡神が宇佐の地を離れる事」であった。

それにしても、僧行信等は誰を呪殺としたのだろうか？

僧行信・・、何処かで聞いた事のある名前だ・・。あ・・そうだ、法隆寺の夢殿、聖徳太子の霊（私は長屋王の霊と思うが）を閉じ込めた男と同一物ではないか？

法隆寺の行信は光明皇后の覚えめでたく、大僧都に昇進し、僧綱のトップとして仏教推進の指導的立場にあった。その行信がなぜ、誰を？

「続日本紀」はこの事件の詳細は述べていない。

行信・大神杜女と田麻呂等を流罪という重い罪を処した事は、呪殺の相手は天皇家の者か、政権の

トップの者と考えられる。

光明皇太后にとって行信は聖徳太子の霊から身を守った大恩人として重く処遇しており、行進が天

皇家の人々を殺害する理由がない。また大神杜女と田麻呂等の八幡宮の者にとつても天皇家の人々は宇佐八幡大神を国中の諸神の頂点として崇めており殺害する必要がない。そうすると政権のトップの者となる。

大仏開眼供養の前年、天平勝宝三（七五二）年四月の「続日本紀」に東大寺大仏開眼供養のための僧綱人事の記録がある。

インド僧菩提（ボダイ）が僧正に、良弁法師を少僧都に任命、行信の名は無い。また大仏造営に貢献した八幡神も開眼供養の席に招かねて居ない。

この大仏開眼会の事実上の推進者は仲麻呂である。

光明皇太后を後ろ楯にする大僧都行信は仲麻呂にとつて眼ざわりな存在であり、大仏造営を通じ頂点に立った八幡神が宗教界の主導権を握る事をおそれ、仲麻呂は意図的に大仏開眼会から除外したのである。

大仏開眼会から排除された行信

と八幡神宮の主神大神田麻呂等が組み、仲麻呂を呪殺しようとしたのではなかるうか？

藤原仲麻呂（恵美押勝）

天平勝宝8（756）年聖武上皇は「孝謙女帝後の皇位継承者として天武天皇の皇子新田部親王子、道祖（フナド）王を皇太子」と遺言して56歳で崩御した。

孝謙女帝は仲麻呂が描いたシナリオに従い、翌年道祖皇太子を廃し、新田部親王の兄舎人親王の子大炊（オオイ）王を皇太子とした。大炊王は仲麻呂の死去した長男の亡妻を妻とし、仲麻呂と親子関係にあった。仲麻呂は内外諸兵事を掌る紫微内相となった。

仲麻呂を倒し孝謙天皇・大炊皇太子を廃し、新天皇を立てる陰謀（奈良麻呂の変）が発覚したが、仲麻呂は橘奈良麻呂の乱を粛正し、独裁体制を確立する。

翌天平宝字2（758）年41歳の孝謙天皇は病んだ母皇太后の孝養ままならないと譲位し、大炊皇太子が即位した。淳仁（ジュンニン）天皇である。

光明皇太后の後楯で権勢を伸張させた仲麻呂であったが、皇太后

も病に臥す事が多くなり、もはや後楯の必要が無いと、大炊を即位させ自らの独裁体制を強固にするための譲位劇であった。

淳仁天皇は仲麻呂の勲功に対し、姓に「恵美（エミ）」名に「押勝（オシカツ）」を贈った。

天平宝字4（760）年光明皇太后が60歳で没すると仲麻呂は朝廷内部で孤立し始めた。仲麻呂は専制を維持するために辺地や外国との緊張関係を作る事を考えた。

道鏡

道鏡が孝謙女帝に初めて出会ったのは天平宝字6（762）年頃、近江の保良宮（ホラノミヤ）であった。

天皇を退位した孝謙上皇は母光明皇太后の死による寂寥感と重石の取れた一種の開放感と40歳前後の体調不良から病に陥り、看病したのが道鏡であった。

道鏡は河内の人で姓は弓削連、梵字の経文を良くし、山林等で修業する禅行を修め、宮中の仏事を行なう内道場に入り呪術を行なう看病禪師であった。

道鏡は宿曜（スクヨウ）秘法で

上皇の病気を平癒させた。この功により仏教界の諸般全般に関わる少僧都に任じられた。

「続日本紀」は称徳と道鏡の關係を「保良宮に御幸中の孝謙の看病に侍し寵を受けるようになり、それを諫言した淳仁天皇と仲たがいをするに至った」と記している。

淳仁天皇の非難は道鏡との男女關係であつたのだろう。男帝であれば問題はなかつたであろうが、女帝であり、相手が宮中に入入りする僧侶であつたため、たちまちスキヤンダルとなつて広がつた。

瀧浪貞子氏はこれには火付け役がいたという。「奈良朝の政変と道鏡」

道鏡の拔擢と引換えに失脚した少僧都慈訓（ジクン）は聖武天皇の看病禪師で、道鏡より十四・五歳年長で仲麻呂や光明皇太后の信頼を得て仏教政策の中心人物、道鏡と孝謙と急速に近づき寵を受ける事を快く思わなかつた。

慈訓は道鏡と孝謙と接近を仲麻呂に報告、それが淳仁を通じて諫言となつた。

それで孝謙はスキヤンダルを撒き散らす慈訓の少僧都を解任し、代わつて道鏡を任命したのである

う。

天平宝字6（762）年6月天皇と上皇の対立が遂に決裂、両者は保良宮を引き上げ、天皇は平城京の中宮院に、上皇はそのまゝ出家して平城京の東、法華寺に入つた。

道鏡が孝謙に出会つてからわずか一ヶ月の事であつた。

惠美押勝の乱

女帝は「大事はわれ、上皇が裁決する。天皇は小事のみ行え」と宣命した。

天平宝字8（764）年、仲麻呂は（新羅遠征のためか？）諸国の兵士の動員を計画した。それが女帝に漏れた。

女帝は21歳で立太子、32歳で即位、そして今45歳、その過去は実権を父母の手にあり、自分は唯の飾り物であつたと思われ、そして母光明子が重態に陥り最後の孝行をつくしたい気持ちから仲麻呂の強い意向により譲位し、太上天皇となつたが、今や仲麻呂が実権を掌握し、太上天皇の我に相談もなく軍事行動を企てようとする事に我慢が出来ず、政権への意欲を駆り立たせたのであろう。

孝謙上皇は仲麻呂の大規模な動員計画を知ると淳仁天皇の駅鈴と天皇御璽を取り上げ、9月11日その日に戦いが小規模のうち勝利する事を願ひ「金銅四天王を祀る寺院を建立する」と宣言した。

仲麻呂は近江に逃れたが9月18日斬殺、淳仁天皇は淡路に流され淡路廢帝と呼ばれた。

孝謙上皇は重祚して称徳天皇となり、少僧都であつた道鏡を大臣禪師に拔擢、道鏡は一躍大臣禪師として政界に登場した。

称徳天皇は現実の政治は天皇が、宗教は道鏡にと考え「私は国家の政を取らねばならない。仏教隆盛のためにも道鏡が高位にある事が必要」と道鏡の辞退を許さなかつた。

神仏習合政治

宇佐八幡宮が再び「続日本紀」に登場するのは天平宝字8（764）年惠美押勝乱の終結後、八幡の大神に封戸25戸が施入され、八幡神の比売神に奉納された。

天平神護元（765）年、称徳天皇は勅を下し、道鏡に授ける「大政大臣禪師の位」は仲麻呂に授けた「大政大臣の官」とは異なり世

俗的な権限を伴うものではないと強調して道鏡を大政大臣禪師に任命した。

称徳・道鏡にとつての当面の課題は天皇の権威の象徴である神祇祭祀と仏教の關係をどうするかであつた。

称徳天皇は重祚の大嘗祭の詔で經典を引用し、神々は仏の守護神であると述べ仏教と神祇の共存を主張し神仏習合を主張した。

称徳の理想である「共治」体制とは法王は法界のシンボルであつて実務的な職務や権限が付与されるわけではなく、天皇称徳を法界のシンボルの立場から權威付け後見するという意味の「共治」であつて、実務を称徳と道鏡で分担するというものではない。これが称徳のいう「神仏習合政治」であつた。

そこでその年神仏習合の宇佐八幡宮、八幡宮の比売神が返上した封戸600戸を復活させた。

比売神と關係を持つ宇佐氏・辛島氏は神宮内の主導権を握り、道鏡に取り入ろうとした。

道鏡も宇佐八幡宮との關係を積極的に進めた。

またその年（765）四国に遷座していた八幡神は「朝廷を守護

し奉らん」と神宣を下し宇佐に戻った。そして、宇佐八幡宮の神託事件が起った。

宇佐八幡宮の神託事件

「続日本紀」の神護景雲3(769)年9月25日の条に宇佐八幡宮の神託事件の事が長々と記している。

道鏡が法王になって三年目、大宰府の主神習宣阿曾麻呂(スゲノアソマロ)が「道鏡を皇位に就けば天下泰平であろう」との宇佐八幡の神託を奏上した事にはじまる。

淳仁を廃位し称徳が重祚したことにより、皇太子問題が解決すべき切実な問題となった。

そこに宇佐八幡神が「道鏡を皇位に」と神託した事は、貴族等にとつては驚天動地の出来事であった。称徳天皇は和氣清麻呂を召していった「夢に八幡大神の使いが現れ、大神が告げたい事があるので尼法均(ホウキン)を寄こしてほしいという。女性の身で宇佐八幡宮へは遠路である。弟のお前が代わり託宣を聞いてまいれ」と。

清麻呂が宇佐神宮に行き、そこで聞いた託宣は「わが国が始まって以来、君臣区別は定まっている。

臣下が天皇になる事は未だかつてない。皇嗣には必ず皇族を立てよ。無道な人は早く排除せよ」と言うものであった。

宇佐から帰った清麻呂は称徳天皇にそのまま奏上したところ、称徳はこの託宣を虚偽と断じて法均・清麻呂姉弟を処罰した。

これが「続日本紀」の宇佐八幡神託事件の顛末である。

瀧浪貞子氏は、この事件の発端である阿曾麻呂の託宣について以下のように推測している。

阿曾麻呂は大宰府の主神となつた時、大宰帥(長官)は道鏡の弟弓削浄人であった。阿曾麻呂は権力の座にあつた道鏡に迎合するため、浄人に近づき、浄人と謀つて八幡宮神官に神託の話しを持ちかけた。

浄人は兄道鏡の立場をより強化するため、また厭魅事件以来中央政府との接触復活の機会を望んでいた八幡宮、特に宇佐に戻つた八幡神で大神氏の復活に危惧を抱いた宇佐・辛島氏はこの話に乗つた。八幡神が宇佐の地を離れていた時期、比売神は一度も託宣を下してはいない。そこで比売神が下す託宣はありきたり物であつては意味が

ない。大神氏の復活を阻止するために、称徳女帝や道鏡法王を歓喜させ、びっくり仰天させるほどの託宣として道鏡を天皇につける託宣が捏造された。

こうして阿曾麻呂を介して三者連合が形成され神託奏上の計画が実行に移された。道鏡は全く無関係とは言えないが、阿曾麻呂が直接の首謀者でそこに八幡宮の主導権争いが絡んで引きされた事件であった。

清麻呂が持ち帰つた託宣に称徳は大いに怒り、この託宣を虚偽と断じて法均・清麻呂姉弟を処罰したが、称徳も道鏡も清麻呂の伝える「天皇は皇嗣でなければならぬ」という託宣を受け入れ従い、称徳は道鏡を皇位に就ける事を断念した。

では称徳はこの託宣を虚偽と断じて均的・清麻呂姉弟を処罰したのか?

託宣の「無道な人は早く排除せよ」という箇所、道鏡と共治を現した称徳にとつて、道鏡の人柄を非難し追放せよとは、道鏡との共治、称徳の政治そのものが否定された事になる。

この部分は法均姉弟が託宣にか

こつて付け加えたのではと思つた。それも腹心の法均清麻呂姉弟に言われた事だけにシヨクであった。

西大寺の建立

天平神護元(765)年四天王像が出来上がり、像を安置する四王堂(シオウドウ)が造営された。聖武天皇の東大寺に劣らぬ大規模な寺院西大寺建立をという事で東大寺造営の長官、佐伯今毛人(イマエミシ)を西大寺造営長官に任命し、本格的造営が始まつた。

31町の広大な敷地に四王堂、薬師金堂、弥勒金堂が造営され、そして東西に八角七重の塔を建てる予定で八角の基盤が出来上がった。これには法王道鏡の存在が大さい。

しかし宝亀元(770)年称徳天皇が53歳で崩御すると、法王道鏡が失脚し、下野の薬師寺別当に左遷され宝亀3(772)年下野で死去した。

道鏡の失脚、称徳天皇が崩御のためか、八角七重の塔が四角五重の塔に変更された。

その東西の五重塔も西塔は平安時代落雷に、東塔は室町時代、文

亀2(1502)年の兵火により焼失した。

称徳天皇の後、天智天皇系の光仁天皇が即位、その子桓武天皇は平城京から平安京へ遷都した。

新朝廷が天武系から天智系へ代わった事により、称徳天皇および道鏡は悪者とされ、実際以上に悪くいわれて現在に至っている。桓武天皇の平安京への遷都により、平城京の寺院の苦難が始まった。

とりわけ大寺で最も新しく、しかも創建者を失った西大寺の苦境は深刻を極め、伽藍は倒壊、焼失し再建の方策さえ立てられない状況で、現在では称徳天皇が建立した当時の建築物は皆無と言える。

H30年3月 記

淡交社 古寺巡礼奈良4 西大寺

西大寺の歴史(聖武天皇が娘阿倍内親王に懸けた夢) 高野 澄

戎光祥出版 日本の神様3 「八幡大神」 田中恆清監修

中央公論社 日本の歴史3 「奈良の都」 青木和夫
講談社学術文庫 「続日本紀(上・中・下) 全現代語訳」

宇治谷 孟 吉川弘文館 「奈良朝の政変と道鏡(敗者の日本史)」

瀧浪貞子 新人物往来社 「古代女帝のすべて」 武光 誠 編
を参考にしました。

会員研究

初代・紋十郎の東京・横浜乗込み(前編)

近藤 政次

序、相模人形芝居のこと、文楽のこと

平成30年2月12日に横浜市

西区紅葉ヶ丘の県立青少年センター1で第45回相模人形芝居大会が開かれ、県内の五座の競演が行



平成28年10月の文楽地方公演パンフより

でいる。

この老舗五座に加え、厚木市に県立厚木東高校の卒業生を中心とするあつぎ東座、平塚市に一人遣いの湘南座がある。プロ集団としては川崎市中原区に本拠を置くひとみ座が乙女文楽(一人遣い)の公演を行っている。

われた。観客は抽選で当選した800余人、1400人の応募があつたという。

“相模人形芝居”と言っても多くの人はとくにイメージできないのが普通だろう。“文楽”、“人形浄瑠璃”と言えば思い浮かべることができよう。そして、やや敷居が高いと感じるのではないか?相模人形芝居は江戸期から神奈川県旧相模国エリアに伝わり、今日傳承されている義太夫節、三味線、人形(三人遣い)が一体となった人形浄瑠璃の名称である。

今日、県内には厚木市に林座、長谷座、平塚市に前鳥座、小田原市に下中座、南足柄市に足柄座のアマチュア五座が存在しており、所在地域を中心に公演や地道な後継者育成、普及活動等に取り組ん

さて、本稿のねらいは以下の3点を述べることにあつた。

- ①人形遣い初代・桐竹紋十郎のこと
- ②明治30年前後の東京の人形浄瑠璃界のこと
- ③大阪・文楽座一座の東京・横浜公演とその影響

一、初代桐竹紋十郎のこと

人形遣い初代桐竹紋十郎は弘化2(1845)年2月に大阪に生まれ、明治43年8月15日に65歳で死去した。本名は小林福太郎。父は人形遣いの桐竹門十郎である。紋十郎は子供時代、商店の丁稚として2、3の店を転々としたが、13歳の時に人形遣いの3代目吉田辰造に弟子入りして辰三郎